

「静まりから生まれるもの」 マルコ 1 : 32 ~ 39

※参照：「静まりから生まれるもの」ヘンリ・ナウエン著。

I 「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」：35。：32~34と：36~39を読みましょう。病に苦しむ人々を癒され、悪霊を追い出され、せっちな弟子たちに応え、町々を巡られ、会堂から会堂へと教え回られる、このような動きいっぱい詰まった文節に挟まれて、この：35の静かな御言葉があります→「朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」。息もつけないような忙（この漢字は、「心」「亡ぶ」）でできています。ただ忙しい中にだけに身を置き「静まり」がないと、知らず知らずのうちに、心は瘦せ細り、心は、養われず、亡んでいくのです）しい活動の真ん中で、安らかな息づかいが聞こえます。あちこちと動き回っている中で、しんとした静寂の時を見ることができます。多くの人々の問題に深くかかわっている中心に、独り退く時のことが記されています。行動の只中に、沈黙の祈りがあります。人々と親しく過ごした後、独りきりになる時間があります。たくさんの活動について記された間に挟まった静けさが支配するこの：35の御言葉を読めば読むほど、主の働きの秘訣がどこにあったかに気づかれます。それは、夜が明けるよほど前、朝早い時間に出かけられたあの人里離れた所に隠されていたのです。その独りになれる所で、主は自分の思いではなく、神の御心に従う決断をする力を得ました。自分の言葉ではなく、神の言葉を語る勇気を、自分の業ではなく、神の業をする力を見出したのです。主は言われました。「わたしは、自分からは何事も行うことができません。…わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです」（ヨハ5：30）。主は、御父の御心に従い、私たちが心から愛し、私たちの罪（憎しみ、恨み、不品行）の為に十字架で死なれ、復活され、救いを成就してくださいました。この独りだけの所で、御父との親しい交わりに身を浸すことによって、主の働きが生まれたのです。独りきりになり、静まり神と深く交わる時を持たなければ、自分の生活が危うくなることに、私たちは気づくべき時が来ています。①沈黙し、静まり神と交わることなくして語られる言葉は、薄っぺらな言葉となります。②静まり、神と人に聴くことなくして語られる言葉は、もはや癒す力がありません。③健全な距離、健全な境界線（「はい」と「いいえ」を健全に言える関係。お互いに違っている人格を認め合う。支配したり、支配されたりしない関係）を持たない近さ（一体化、同化、同一化、独り静まる時を持たない近さ、すべて支配、縛られている）は、真の救済、援助をもたらしません。④静まり、神と深く交わる時を持たないと、何をしたとしても、内実の伴わない見せかけのものになってしまいます。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり（主を信じ、日々、静まり主と深く交わる時を持つ、主との交わりにとどまる）、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです（神のための実を結ぶことができない）」（ヨハネ15：5）。⑤両方のバランスが大切：i 沈黙することと語る事 ii 離れ退く事と深く関わる事 iii 距離を取る事と近づく、向き合う事 iv 静まり神と交わる事と主のからだである教会の交わりに生きる事、これらの間に注意深くバランスを保つことは、キリスト者生活の土台を築くものです。それゆえに、私たち一人ひとりが最も注意を払うべき課題です。

Ⅱ 誤った活動主義の生活。私たちは皆、自分自身の人生の意味や価値を人に認めてもらえる貢献度によって測ろうとしてしまいます。そうすると私たちの幸福感は、自分が他の人にどれだけ評価されたかによって左右されるようになります。自分がしたことの結果を自分の価値を測る物差しにしてしまうのです。自分の業績を自分の価値を決める物差しにしてしまうと、私たちは、いつもびくびくして暮らすようになります。自分のやれた事によって作られた期待を裏切らないでいられるか不安になります。この心配、不安により多くの人々が自己破滅に追いやられました。自分たちの弱さを認める事への恐れは心を蝕み、教会の交わりや創造的な分かち合いの実現を妨げます。自分が何者であるかを、神の愛にではなく、この世の判断に任せてしまうと、絶えず人の目、評価が気になり、人から高い評価を得たいという欲求が募ります。そうすると、ますます孤立して行きます。なぜなら、友情や愛は、傷つき易い心、自分の弱さをお互いにさらさないでは経験できないものだからです。

Ⅲ 私たちを生かす静まる生活。キリスト者として生きる事は、この世に支配されずに、この世に証し人として生きるということです。こうした内なる自由は、独り静まり神と交わる中で育まれます。神の愛にではなく、自分の活動だけにしがみついていると、物事に執着するようになり、自分を守るために身構えるようになります。他の人を見る目が変わってきます。神の恵みを分かち合う人ではなく、なるべく近づきたくない競争相手として見るようになるのです。神の前に静まる中で、自分の執着心で凝り固まった幻想の正体を見ることができ、本当の自分とは、業績で価値が決まる存在ではなく、神に愛され神が「高価で尊い」と言われる存在だと気づくのです。御言葉を読み祈り静まる中で、こちらが口を開こうとする前に語って下さる神、誰かを助けようとする前に、まず私たちが癒して下さる神、他の人を解放しようとするずっと前に私たちが解放して下さる神、誰かを愛そうとする前に私たちが愛して下さる神を知って行くのです。自分の価値を認めさせるための活動ではなく、静まり神と交わる恵みから生まれる愛の実践、主を伝える事、奉仕、ささげ物を神は喜ばれます。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」イザヤ43：4